

手紙を書くスペンサー

— 初期近代文学における書簡出版 *

水 野 眞 理

本稿は英国初期近代、すなわち 16～18 世紀の文学空間における書簡ないしは書簡体出版物の機能を問い直すことを目的とする。前半では機能に着目して西欧における書簡文化の見取り図を描き、後半では事例研究としてエドモンド・スペンサーの書簡執筆を取り上げる。

英文学研究でとりあげられる書簡といえば、作家の書簡と、書簡体小説、あとはごく少数の書簡体詩が中心であろう。作家の書簡は作家の「作品」とは別のもので、つまり、作り物でない真情が吐露されたものと考えられる傾向があり、そのために伝記を書くときの重要な材料とされ、また作品の背後にある作家の思考を示す注釈として用いられてきた。たとえば、キーツの書簡のある翻訳には、このような解説がつけられている。「詩についての思索、魂の内奥から発する種々の想念、肉親への愛、恋人への愛、青春の苦悩と喜びの一切は、この書に充ちている」と¹。

* 本稿は 2019 年 5 月 25 日 安田女子大学で開催された日本英文学会第 91 回大会シンポジウム「初期近代文学空間としての書簡」での筆者の分担報告に加筆訂正したものである。

そのような種類の書簡があることは否定しない。しかし作家の書簡には、本人の没後に誰かが集めて編集・出版したものの他に、作家が自ら公刊した書簡も多数存在する。後者は差出人、受取人ともに実在の人物であるという点ではノンフィクション的であるが、一方、個人の生（なま）の感情を綴ったものというより公を意識した出版物という点ではフィクション的といえる。書簡の書き手の多くは、手元に写しを保存し、それを自ら編集した上で公刊した。また、詩人たちは、得意の韻文によって知人に宛てた形の書簡を書き、それを公刊してきた。いわゆる書簡体詩（epistolary poems）である。これらの公刊を想定した書簡、あるいは個人宛の書簡の衣をまとった韻文作品は、送り手と受け手を親密な個として演出しつつ、公共に向けて文学的・政治的・道徳的メッセージを発信する、極めて演技的なテキストとすることができる。そこでは、真実性は大きなポイントではない。真実性に関して言えば、地方や外国の時局を伝える報告書簡が標榜するノンフィクション性もまた必ずしも保証済みでないことに留意する必要がある。

1. 書簡の機能

最初に、「書簡」と呼びうるものの機能を分類し、西欧における書簡文化の見取り図を描いておこう。ただしこの分類は網羅的なものではなく、また、一つの書簡が複数の機能を持つ場合もある。

1.1 書き手本人により公刊された個人的書簡集

書簡出版は古代ローマで既に一つのジャンルとして確立していた。最も有名なものはキケロ（Marcus Tullius Cicero 106-43BC）の書簡集である。キケロはパピルス上に文章をしたためるとともに、奴隷・解放奴隷にコピーを保存さ

せ、それらを元にキケロ自身、ときには他人の編集を経て、出版、商品化した。特に友人アッティクス (Titus Pomponius Atticus 110–32BC) への書簡が多い。アッティクスは出版業者でもあり、キケロが政治的に不遇であった時代にキケロの書簡を出版してその経済を支援した。このようにしてキケロの親しい知人・縁者宛の書簡 (*epistulae ad familiares*) は純粹に宛名の人物だけに読ませるものというよりは、しばしば、不特定多数の読み手を想定した道徳的省察を含むようになった。キケロの書簡が、中世から初期近代の英国にまで影響を与えたのは、文典としてのみならずその内容も含めてのことであったのだ。1345年、ヴェローナにおいて、キケロのアッティクス宛書簡集、弟クイントゥス (Quintus Tullius Cicero 102–43BC) 宛書簡集、カエサル暗殺者ブルートゥス (Marcus Junius Brutus 85–42BC) 宛書簡集がペトラルカ (Francesco Petrarca 1304–74) によって再発見されたことが、中世以降へのキケロの影響力を強めた²。ペトラルカ自身、キケロに倣い自らの書簡を編集、出版したし、エラスムス (Desiderius Erasmus 1466–1536) も自らの書簡を出版した一人である。彼のラテン語書簡は、トマス・モア (Thomas More 1478–1535) に宛てたものも含め、彼自身が出版したのち、既にその存命中に英訳されてイングランドでも出版されている³。

2 キケロの弟宛書簡集は1561年に英訳が出ている。*An epistle or letter of exhortation vwritten in Latyne by Marcus Tullius Cicero, to his brother Quintus the proconsull or deputy of Asia.*

3 ロンドンで英訳、出版されたエラスムスの書簡には次のようなものがある：存命中の出版では *An epistell of the famous doctor Erasm[us] of Roterdame unto the reuerende father and excellent prince Christofer bysshop of Basyle conteinyng the forbedynge of eatynge of flesshe and lyke constitutyons of men, etc.,* (1533)。没後の出版では、*An epistle of the famous clerke Erasmus of Roterodame, concernynge the veryte of the sacrament of Christes body and bloude* (1547)。*The epistle of Erasmus Roterodamus, sente vnto Conradus Pelicanus, concerning his opinion of the blessed Sacrament of Christes body and bloude.* (1554)。17世紀にはエラスムス、メランヒトン (Philipp Melanchthon

1.2 公共での朗読を意図した書簡

同じ古代ローマの属州であった地中海東岸では、キリストの使徒たちが、生まれて間もない各地の信徒団体、あるいはその指導者たちに宛てて、教義の解説と激励を兼ねた書簡を送っていた。それらは「差出人、宛先、挨拶、本文、挨拶」という定型を持ち、信徒団体において朗読されて使徒の声を伝えた。使徒を代表するパウロ (?-ca65) の文書 (Pauline epistles) とされるものに加え、パウロの名を冠することによって指導的権威を行使するもの、パウロ以外の使徒たちによるものなどがのちに新約聖書と呼ばれる諸々の文書に混じって正典化され、出版された。その後の教父や神学者たちもまた——とりわけ宗教改革の時代には——自らの神学的姿勢を書簡の形で出版するようになる。

1.3 報告書

大航海時代には、世界各地への航海・探検の報告が書簡の形で残された。コロンブス (Cristóbal Colón ca1451-1506) は第一回の航海を終える直前、報告書簡をスペイン国王夫妻や宮廷の高官に対して送っている。コルテス (Hernán Cortés de Monroy y Pizarro 1485-1547) もまた、メキシコのアズテク文明とその征服に関して、スペイン国王カルロス五世に長文の書簡 (despatches) を送り、それらのうちの3通がコルテスの存命中に出版されたばかりか、ラテン語やイタリア語に翻訳されてヨーロッパ各地で出版されている。これらの報告書簡は、当時の非西欧世界の状況を知る手がかりとなるが、書き手の読書歴や願望や利害を色濃く反映させた誇張、脚色、虚偽を含むために、全幅の信頼を置くには程遠いものと言わなければならない。

、1497-1560)、モア、ビベス (Juan Luís Vives 1492-1540) ら四人の人文主義者のラテン語による書簡をまとめた書物がロンドンで出版されている: *Epistolarum D. Erasmi Roterodami libri XXXI; et, P. Melancthoni libri IV: quibus adjiciuntur Th. Mori & Lud. Vivis epistolae: una cum indicibus locupletissimis* (1642).

探検・征服に従軍した司祭たちや、その後現地に入った宣教師の報告書間も多く残されている。ラス・カサス (Bartolomé de las Casas 1484-1566)、ザビエル (Francisco de Xavier 1506-52)、フロイス (Luis Fróis 1532-97) らの報告書簡は探検者・征服者たちとは異なる眼差しで非西欧人をとらえたものとして注目に値する。

ウォルター・ローリー (Walter Raleigh 1554-1618) は 1595 年に行ったギアナ探検の報告『広大で豊かで美しいギアナ帝国の開示』(*The Discoverie of the Large, Rich, and Bewtiful Empyre of Guiana....Performed in the yeare 1595. by Sir W. Raleigh Knight,...*) を翌年出版したが、それを宮廷の要人チャールズ・ハワードとロバート・セシルに仰々しい文言で献呈しているのみならず、本文中でしばしば“your lordship”、“your honour”といった二人称の敬称で相手に語りかけ、事実上書簡の形をとっている⁴。

アイルランドをはじめとする植民地総督たちも本国政府や国王に宛ててこまめに報告書簡を送っているが、それらは、実際には秘書の手で筆記されたものであった。

1.4 公文書

公文書は、何らかの政治的権威を帯びた公人、あるいは法人が、その権威を行使する文書であり、特定の対象を念頭においている。その意味で、公文書は書簡的な形をとりがちだといっても過言ではないだろう。例えば 1553 年、エドワード六世の死去にともない、メアリー一世が即位したことが出版物として発表された。この布告 (Proclamation) は、イングランド・フランス・アイルラ

4 献辞の冒頭は次のようなものである。“To the Right Honorable My singular good Lord and kinsman, Charles Howard, knight of the Garter, Barron and Counciller, and of the Admiralls of England the most renowned: And to the Right Honorable Sr Robert Cecyll Knight, Counciller in her Highnes privie Councils.”

ンドの女王兼国教会の首長から国民に宛てた書簡形式で、服従を求める内容である。1586年8月のエリザベス一世の転覆とスコットランド女王メアリのイングランド女王即位を謀ったバビントン（Anthony Babington 1561-86）の陰謀事件解決に際して、ロンドン市民らの祝意に答えて女王からロンドン市長（Lord Mayor）に宛てた書簡も挙げるができる。

また、国王や、政府内の高位の官職を持つ人物と同等の相手の間で、書簡がやりとりされたことはいうまでもない。それらは使節が運ぶという危険性のゆえにしばしば暗号化された。マリー・アントワネット（Marie-Antoinette-Josèphe-Jeanne 1755-93）の暗号書簡は有名であるが、エリザベス一世およびその側近たちもまた、暗号書簡を送っている⁵。また、暗号化という隠す方向とは逆に、書簡の出版という開示の身振りによって読み手やその党派を操作することも行われた。

1.5 書簡体文書

書簡の伝統のもう一つの流れとして、形式上は宛先を持つ書簡の形をとりながら、実際には、書簡以外の機能を帯びた種々の文書が存在する。

ホラティウス（Quintus Horatius Flaccus 65-8BC）は書簡体詩の形で自らの出自や人生哲学を語り、また詩論を展開した。オウィディウス（Publius Ovidius Naso 43BC-ca17AD）はローマから追放された先の黒海沿岸からローマの家族や知人や為政者宛の、あるいは宛名のない書簡詩を送って追放の身の悲哀を歌い、それらを出版しつつ帰国を嘆願した。興味深いことに、このような書簡詩の形式は古典的教養を備えた詩人たちを魅了した。例えば英国では17世紀のダン（John Donne 1572-1631）、ドライデン（John Dryden 1631-1700）、18世紀オーガスタン期のポウブ（Alexander Pope 1688-1744）ら

5 西欧近代における暗号書簡に関しては S. Tomokiyo, *Ciphers during the Reign of Queen Elizabeth I* <<http://cryptiana.web.fc2.com/code/elizabeth.htm>> を見よ。

が優れた作品群を生んでいる。

さらに、古代から初期近代のパトロネジシステムの中で、書物の書き手、あるいは版元は、書物の最初にパトロンへの献辞を書簡の形で掲げた。献辞は本文テキストに対して「付録」あるいは「おまけ」、すなわちパラテキストとして文学研究上で軽視されがちであるが、ジュネット (Gérard Genette) が『スイューテキストから書物へ』(Seuils 1987) においてパラテキストの重要性を詳説している。彼は、献辞という書簡によって、作者はその作品を有力者に献呈し、その人物を賞賛し、その見返りに何らかの援助—— 端的な金銭の場合もあれば、悪口や批判からの擁護の場合もある—— を願う、という卑屈な身振りを行うのだと述べている。しかし一人の相手をお願いのメッセージを伝えることが目的なら、書物の中に印刷する必要はないはずである。そう考えると、書物の書簡体の献辞は、公共にむかって、著者が有力者と懇意でありその庇護下にある、ということを示し、書物に付加価値をつけ、批判を防ぐための身振りなのだということができよう。さらにジュネットは、献辞は「作品の源泉や成立に関する情報、あるいは作品の形式や意味に関する注釈など」を含むことができ、「その結果として、献辞の機能は序文の機能を明らかに侵食することになる」(146) とも述べている。

時として、献辞とは別に、一般読者に対する書簡体の文章が序文の機能を担う場合もある。有力者への献辞と読者へのメッセージの両方を持つ書物は数多くあるが、一例を挙げるなら、上で触れたローリーが『ギアナ帝国の開示』をハワードとセシルに宛てた書簡体の献辞で始めた後に、6 ページにわたる序文的書簡「読者へ」(“To the Reader”) を置いている。またドライデンは『驚異の年』(Annus Mirabilis 1666) を、首都ロンドンとその重鎮たちへの書簡体献辞で始め (4 ページ)、詩を解説する長文の書簡を義兄のロバート・ハワード (Sir Robert Howard) に宛て (11 ページ)、その中で 53 行にわたってアルビマール (Albemarl) 公爵夫人に宛てたヒロイックカプレットの書簡詩を挿入する、という念入りな書き出しでこの作品を始めている。エラスムスの『痴愚神

礼賛』(*Moriae encomium* 1511)の冒頭には、献辞と序文を兼ねて友人モアへの書簡が掲げられている。

1.6 虚構作品中の手紙および書簡体小説

劇作品中や、散文・韻文の物語中でしばしばプロット展開の鍵として手紙が用いられる。シェイクスピア (William Shakespeare 1564-1616) の『ハムレット』(*Hamlet*)、シェリー (Mary Shelley 1797-1851) の『フランケンシュタイン』(*Frankenstein: or The Modern Prometheus* 1818)、ストーカー (Bram Stoker) の『ドラキュラ』(*Dracula* 1897) などその例は枚挙に暇がない。これらは、公開を前提としない完全に私的な手紙か、または上の 1.1-1.5 のどれかを模したものの、ということになるので、ここでは詳しくは立ち入らない。虚構作品全体が書簡で構成されている場合、書簡体小説 (epistolary novel) という一つのジャンルとして扱われる。英国では 17 世紀末に匿名出版された『ある貴族とその妹の恋愛書簡集』三部作 (*Love-Letters Between a Nobleman and His Sister* 1684-87) が英国小説の嚆矢とされ、この仕掛けが 18 世紀小説の勃興期にリチャードソン (Samuel Richardson 1689-1761) の書簡体小説の土台をなしている⁶。

2. 手紙を書くスペンサー

ここからは作品内外で書簡を活字上に残している初期近代の事例として、エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser ca1552-99) を検討したい。スペンサーは上で触れた概観の 1.1 (個人書簡集)、1.3 (報告書簡)、1.5 (献辞)、1.6 (虚構作品中の手紙) の書簡機能に手を染めている。以下、これらの書簡

6 『ある貴族とその妹の恋愛書簡集』の匿名著者は王政復古期の女性劇作家アフラ・ベーン (Aphra Behn 1640-89) だとされてきたが、疑問が出されている。

のさまざまな機能の間の関わりを考察する。印刷文化を重視して、テキストは初版のファクシミリを使用する。

2.1 献辞

スペンサーの最初の著作と言えるものは1579年の牧歌集『羊飼いの暦』(*The Shepheardes Calender* 1579)である。初版タイトルページ (Fig. 1) ではイタリック体、ローマン体、そしてゴシック体と三つの書体を混在させて、読者の目を引いてる。それは版元のシングルトン (Hugh Singleton ?-1593) の戦略とも、駆け出しの詩人であったスペンサーの意向とも解釈できる。タイトルに続けて、献呈先であるフィリップ・シドニー (Philip Sidney 1554-86) の名が、「高貴にして高德の紳士、学芸と騎士道の全ての称号にもっとも値する方」という賛辞とともにごく

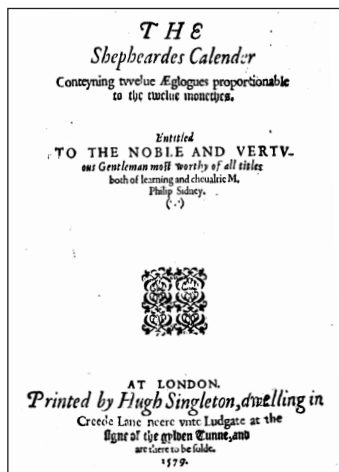


Fig. 1 Edmund Spenser, *The Shepheardes Calender* (1579) タイトルページ

控えめに挙げられている。この献辞じたいは書簡ではないが、タイトルページの裏 (Fig. 2) では、スペンサーが自らの小さな作品に宛ててメッセージを送っている。「行け、小さな本よ」という書き出し、そして書物に自らの運命を託す文言は、オウィディウスが『悲しみの歌』(*Tristia*) で同様の呼びかけを行って以来、文学上の約束事となっていた謙遜の身振りである⁷。しかし、

7 *Tristia* I. 1. 1 "Parve-nec invideo-sine me, liber, ibis in urbem." (Little book, you will go without me—and I grudge it not—to the city.) このトポスは、次のような詩人たちによって用いられている。ホラティウス (*Epistles* I.20.1)、チョーサー (*Troilus and Criseyde* 跋文)、ボッカチオ (*Teseida* xii. 84)、ホーズ (*Pastime of Pleasure* 跋文)、スケルトン (*Garlande of Laurell* 跋文)、パニヤン (*Pilgrm's Progress* 第二部冒

3-4 行目で本の行き先の人物を「高貴さと騎士道の筆頭」とを持ち上げていることから、この詩は事実上、タイトルページに挙げられていたシドニーへの献辞の機能を持つとすることができる。この詩集は、女王エリザベス一世の20歳も年下のフランス皇太子アランソン (Francis Duke of Anjou and Alençon 1555-84) との結婚に反対する政治的メッセージを含むがゆえに、スペンサーの名を伏せて匿名で出版されていて、このページの下部には、書き手・差出人が自らを筆名 (pseudonym) の「相応しくない者」(Immeritò) と呼んでいる⁸。

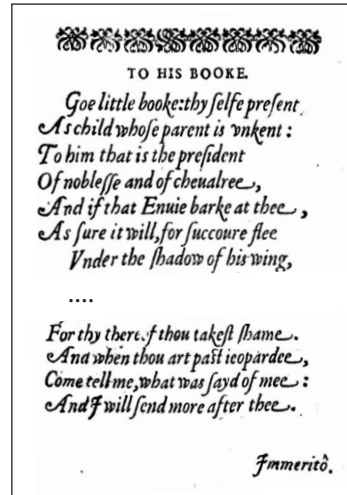


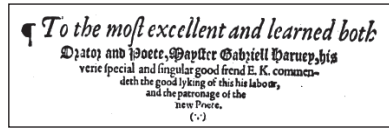
Fig. 2 Edmund Spenser, *The Shepheardes Calender* (1579) タイトルページ
裏 著者 Immeritò (=Spenser) から著書へのメッセージ

さらにこれと向かい合うページから4ページを費やして、イニシャル E.K. なる人物から「雄弁家にして詩人」のゲイブリエル・ハーヴィ (Gabriel Harvey ca1552-1631) に宛てた献辞が掲げられる。

ㄨ頭)。(Shoeck 370-71.)

8 ここでの危険は詩人スペンサー自身に関わるものであるとともに、版元のシングルトンに関わるものでもあった。なぜなら1579年10月にシングルTONはスタブズ (John Stubbs ca.1544-89) の政治パンフレット『大口開く深淵の開示』(*A Discoverie of a Gaping Gulf*) を出版したが、それがエリザベス一世のアランソンとの結婚に反対するものであったことから作者スタブズ、版元シングルTONと販売者ページ (William Page) が逮捕された。当初は重罪 (felony) として、のちに扇動陰謀 (conspiracy to incite sedition) の科で裁判にかけられ、有力者につてのあったシングルTON以外の二人は11月に右手を切断された。『羊飼いの暦』は8月には印刷に回っていたらしく、シングルTONは恐らく罰金を払って12月に出版を果たしている。

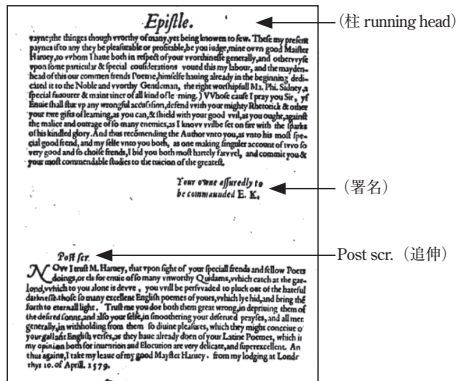
Fig. 3はその冒頭部分、Fig.4はその末尾である。これが書簡の身振りで書かれていることは、“Epistle”というrunning head(柱)、末尾の署名‘Your owne assuredly to be commaunded E.K.’、追伸の最後に“thus againe, I take my leaue of my good Mayster Haruey, from my lodging at London thys 10. of April. 1579.”と、挨拶と日付と場所が添えられていることから明らかである。E.K.が誰のことであるかは未だに確たる答えは出されていないが、一応の答えとしてスペンサーの大学時代の友人であるカーク (Edward Kirke 1533-1613) が想定されている⁹。本来の献呈先であるシドニーは貴族にして文人であり、エリザバス一世の寵臣レスター伯 (Robert Dudley, Earl of Leicester 1532-88) の甥であるのに、その献呈辞は



宛先

差出人
用件

Fig. 3 Edmund Spenser, *The Shepheardes Calender* (1579)
E.K. から Gabriel Harvey への献呈書簡冒頭



(柱) running head)

(署名)

Post scr. (追伸)

Fig.4 Edmund Spenser, *The Shepheardes Calender* (1579)
E. K. から Gabriel Harvey への献呈書簡末尾

9 ゾンマー (Heinlich Oskar Sommer) は E.K. はスペンサー自身の偽名だとし、ディ・セリンコート (Aubrey De Sélincourt) は E.K. をカークとしている。しかし、カークが国教会を奉ずる家系にあり、スペンサーがこの詩集で標榜するレスター伯よりの武闘派プロテスタント的な姿勢とは相容れない、という説もある。最新の伝記を著したハドフィールド (Andrew Hadfield) は、E.K. がカークであることは否定しないものの、E.K. の部分とされている文書の大半はハーヴィとスペンサーの合作であり、そこに二人の共通の知人であった E.K. の手も加わっている可能性がある、としている。(Hadfield 123)

形ばかりのものであるのに対し、ハーヴィへの献辞は、パストラルというジャンルと、意図的に粗野な文体との整合性についての長々とした弁護であり、まさにジュネットのいう、序文の機能を侵食する献辞となっている。追伸の部分では、書き手はハーヴィが過去に出版したラテン語の詩を賞賛し、英語の詩も出版するように勧め、本書を使ってハーヴィの売り込みさえおこなっている。そればかりか、この E.K. は 2 ページにわたる全体の梗概 (The *generall argument of the whole booke*) に加え『暦』の 12 の月の牧歌 (eclogue) に要旨と詳細な注、寓意の解説をつけて、この詩集があたかも注釈に値する古典でもあるかのような体裁を生み出している。詳注をつけることは英語で出版された詩集としてはかつてない新機軸であった。その後文学の世界から姿を消すカークにそこまでの仕事のできたのかは大いに疑問であり、それはスペンサーとハーヴィの共同作業ではないか、というハドフィールドの説にはうなずけるものがある。

2.2 書簡集

『羊飼いの暦』の献呈先のハーヴィはスペンサーのケンブリッジ時代以来の友人であった。この詩集の翌年 1580 年には、ハーヴィと Immerito すなわちスペンサーの間で交わされたとする書簡集『最近二人の大学人の間で交わされた三篇の上品で機知に富む親密な書簡集』*Three Proper, wittie, and familiar Letters: lately passed between two University men* (1580) によって二人の親しい関係が宣伝される¹⁰。二人は最近の地震とその原因について、そして文化的ナ

10 この書簡集の版元ビンマン (Henry Bynneman ?-1583) はホリンシェッド (Raphael Holinshed ca1525-80?) の『年代記』(*The Chronicles of England, Scotlande and Ireland* 1577) を出した、当時では英国最大の出版業者であり、そこから書簡集を出したことは二人にとって、特に正体を明確にしているハーヴィにとっては宣伝効果が大きかったと考えられる。またビンマンはスペンサーがベルギー人のヤン・ファン・デル・ノート (Jan van der Noot 1539-95) の依頼によってペトラルカ

シヨナリズムの波の中で起こった音量詩 (quantitative verse) の実験について、考察と作品をやりとりしている。そこには10年後にようやく出版されることになる『妖精の女王』(*The Faerie Queene* 1590)の一部を書写手稿で読んだハーヴィの批判も含まれている¹¹。Fig. 5はその冒頭につけられた書簡のタ



Fig. 5 Gabriel Harvey & Immerito (=Edmund Spenser), *Three Proper, wittie, and familiar Letters: lately passed between two University men* (1580) 両著者の「味方(Welwiller)」から「礼を弁えた購買者」への序文的書簡 冒頭

イトルである。書簡集に書簡がつけられ、まさに屋上屋を重ねる形である。「著者の味方」と称する匿名の人物から「礼を弁えた購買者へ」となっていて、この出版が「礼を弁えない敵」に対する挑戦であることが示される。が、宛先を「読者」でなく「購買者」と露骨に金銭を表面化させた表現は品がなく、不必要に大きな文字で書かれた‘Curteous’とも相容れないものである。竹村はるみ氏によれば、「礼を弁えない」敵の一人ナッシュ(Thomas Nashe 1567-1601?)が、この匿名の「味方」とはハーヴィ自身だと嘲っている。(29-30) このようにハーヴィ＝スペンサーコンビが自己宣伝的な書簡集出版を行ったことを考えると、一年前の『羊飼いの暦』もまた二人の自己宣伝的な合

10 とデュ・ベレー (Joachim du Bellay ca1522-1560) の寓意的ソネットを匿名で英訳したとされる『俗人劇場』(*A theatre wherein be represented as wel the miseries & calamities that follow the voluptuous worldlings* 通称 *A Theatre for worldlings* 1569) の版元でもある。

11 ハーヴィの批判は、「妖精」などという土俗的な要素を入れてアリオスト (Ludovico Ariosto 1474-1533) のロマンス『オルランド狂乱』(*Orlando furioso* 1532) に迫ろうなどという無駄な努力をやめて、プラウトゥスにならって古典的喜劇を書け、というものである。しかし、完成された『妖精の女王』における妖精の要素はさほど多くはない。「妖精の国」はイングランドの寓意であり、妖精の女王は理念的な存在であって作中に登場せず、登場人物に妖精らしい特徴は見られない。ハーヴィが見た手稿から完成稿までに大きな書き直しがあったのか、ハーヴィが手稿の内容を読まずにタイトルだけからこのような否定的な反応を見せているのか、判断に迷うところである。

作であると考えられるのも無理のないところであろう¹²。スペンサーが個人に宛てた書簡がこの胡散臭い書簡集以外に残っていないことは残念というほかはない。

2.3 『妖精の女王』における書簡的献辞・書簡的序文

スペンサー自身が自らの名前を明らかにして書いている献辞は、『妖精の女王』の前半3巻をエリザベス一世に捧げたもの以降になる。これを年表にまとめると下のようになる。

Spenser の主な作品の献呈先

1590 *The Faerie Queene*, Books I-III > Elizabeth I; “A Letter of the Authors” > Walter Raleigh; Dedicatory Sonnets > noble men and women

1591 *Complaints* (Publisher’s dedication > the reader)

1591 “The Ruines of Time” > Pembroke 伯夫人 Mary Sidney

1591 “The Teares of the Muses” > Strange 卿夫人

1591 “Virgil’s Gnat” > 故 Leicester 伯 Robert Dudley

1591 “Prosopopoeia. Or Mother Hubberds Tale” > Compton 卿夫人のち Mountegle 卿夫人

1590 “Muiopotomos. Or The Fate of the Butterflie” > Lady Elizabeth Carew

12 ハーヴィはこの書簡集の中で名指しはしないものの、もとアイルランド総督で王室家政監査役のクロフト (James Croft ca1518-90) に対する攻撃を含めたために収監され、またオクスフォード伯 (Edward du Vere, Earl of Oxford 1550-1604) に対する揶揄はその後リリー (John Lyly ca1553-1606)、グリーン (Robert Greene 1558-1592)、ナッシュらからの攻撃を誘発することになり、自己宣伝はかえって彼の身を危うくした。スペンサーとハーヴィの関係については竹村はるみ「書斎の中のシドニー・サークル：スペンサーの友情伝説を読む」圓月勝博編『食卓談義のイギリス文学：書物が語る社交の歴史』（彩流社 2006）を見よ。

1595 *Colin Clouts Come Home Againe* > Walter Raleigh

Astrophel. A Pastorall Elegie upon the death of ...Sir Philip Sidney. >

Essex 伯夫人 Frances (もと Philip Sidney 夫人)

1596 *Daphnaïda. An elegie upon the Death of ...Douglas Howard* >

Northampton 侯爵夫人 Helena

1596 *The Faerie Queene*, I-VI > Elizabeth I

1596.9 *Fowre Hymnes* > Cumberland 伯夫人 Margaret と Warwick 伯夫人 Mary

『妖精の女王』の最初の3巻では、タイトルページ裏に「陛下の卑しき僕エド・スペンサー」からエリザベス一世への献辞を載せ、巻末にはイングランド、アイルランドの男女16人もの貴族への献呈ソネットをまとめて載せているが、それらは常套句の域を出ないものであり、詳しくは立ち回らない。ただ、重要なことは、初版の献呈先のいくつかは、翌年に出た詩集『嘆き』(Complaints 1591)に収められた各詩の献呈先と重なっていることである。スペンサーはエリザベスの宮廷で誰に作品を献呈すべきか、『妖精の女王』初版の時点で把握していたことになる。想像を逞しくすれば、献呈ソネットの宛先に関しては、彼をエリザベスの宮廷に紹介したウォルター・ローリーの助言があったのかもしれない。実際献呈先の男性の中でローリーは出版への功労とは裏腹に、その身分に応じてひっそりと最後に位置している。

1596年に出た『妖精の女王』6巻を合わせた第二版においてはエリザベス一世への献辞で賞賛の文言が増強され壺(urn)型に配置

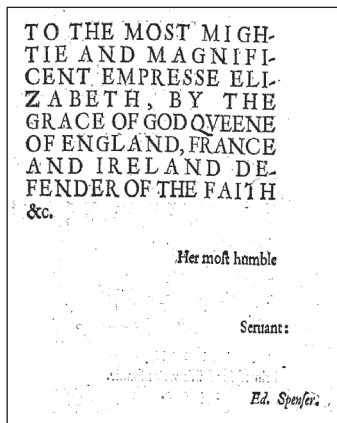


Fig. 6 *The Faerie Queene*, Books I-III (1590) Elizabeth Iへの献辞

することで恭順の身振りを高めているが、献呈者であるスペンサーの名前が削られていていっそう書簡の形からは遠ざかっている。第二版では貴族への献呈ソネットも削除されている。既に彼自身、あるいは書物自身の名声が確立され、権威付けは不必要だとスペンサーが考えたのか、それとも、過去に献呈を受け入れた面々の宮廷での存在が弱まったのか、はたまた、彼らが重臣セシル (Robert Cecil, Earl of Salisbury 1563-1612) のスペンサーへの敵意 (“The rugged forehead” *FQ*, IV. i. 1.1) を見て献呈を断ったのか、調査の余地がある。

『妖精の女王』初版の末尾には、ロー

リーに宛てて、序文の機能を持つ長文の書簡が付けられている。これは著者の意図を解説したものとしてこの詩を読む上で必ず参照される文書である¹³。Fig. 7 はその冒頭、Fig. 8 はその末尾である。スペンサーはここで、作品の目的が紳士を成型する道德寓意詩であること、王になる前のアーサー (Arthur) と妖精の女王グロリアーナ (Gloriana) の作中での意義、叙事詩の伝統に従い *in medias res* で語られた1巻から3巻の物語の発端を説明している¹⁴。注意したいのは、冒頭の4行目に「読者の理解をおおいに助ける」とあり、書簡の宛先

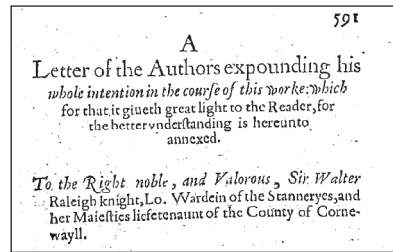


Fig. 7 *The Faerie Queene* Books I-III (1590)
Walter Raleigh への書簡 冒頭 (用件、宛先)

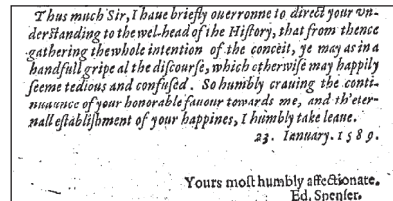


Fig. 8 *The Faerie Queene* Books I-III (1590)
Walter Raleigh への書簡 末尾 (結論、挨拶、日付、署名)

13 1589年1月23日付け (これは3月を年のはじめとする旧式の暦なので実際には出版年と同じ1590年の1月23日)。

14 それが奇妙に本文とずれているのが謎であるが、スペンサーは本文の原稿を版元に送ってしまった後、ローリーへの書簡を書いたのかもしれない。

はローリーであっても、事実上、これが、読者一般にあてた解説的序文であることがわかる。

2.4 『妖精の女王』の作中の書簡

虚構作品である『妖精の女王』の作品中で登場する唯一の書簡が、虚偽と中傷の書簡であることは興味深いことである。第1巻の結末は「神聖」を体現する赤十字の騎士 (Redcrosse Knight) が、「真実」を体現する乙女ユーナ (Una) の求めで黙示録的な戦いによって反キリストを表す龍を倒し、ユーナと結ばれる、という運びになる。ユーナの父親であるエデンの王が、娘と赤十字の騎士の婚約を予告しようとするその瞬間、使いの者が手紙をもたらす。(Fig. 9) 差出人はフィデッサ (Fidessa)、その正体は、物語の早い段階で赤十字の騎士を誑かしてユーナから引き離し、拳句に巨人オーゴリオ (Orgoglio) のダンジョンに幽閉されるように仕向けた魔女デュエッサ (Duessa) である。彼女は赤十字の騎士が既に自分と婚約していると述べ、ユーナとの結婚は無効であると訴える。

赤十字の騎士がデュエッサと婚約したというのは虚偽であるものの、二人は冒険の途中で深い関係を持っているので、この手紙は全く根も葉もないことを述べているわけでもない。重婚、近親婚などを防ぐために、結婚の広告 (banns) に対し異議申し立てを認めることは国教会・カトリック教会共通の慣習であった。注目すべきは最後の 'Fidessa' という署名が、韻律外の一語だということである。つまり、全編の中でここ

宛先
挨拶
差出人
用件
理由
結論
挨拶
署名

To thee, most mighty king of *Eden fayre,*
Her greeting lends in these sad lines address,
The wofull daughter, and forsaken heyre
Of that great Emperour of all the Welt;
And bids thee be aduized for the best,
Ere thou thy daughter linck in holy band
Of wedlocke to that new vnknown guett:
For he already plighte his right hand
Vnto another loue, and to another land.

....

Therefore since mine he is, or free or bond,
Or false or true, or liuing or elfe dead,
Withhold, O fouerayne Prince, your hasty hond
From knitting league with him, I you aead;
Ne weene my right with strength adowne to tread,
Through weaknesse of my widowed, or woe:
For truth is strong, her rightfull cause to plead,
And shall finde friends, if need requirith foe.
So bids thee well to fare, Thy neither friend, nor foe,
Fidessa.

Fig. 9 *The Faerie Queene*, Book I, Canto xii, Stanzas 26 and 28 Fidessa (=Duessa) から Una の父への書簡

だけ、書簡のフォーマットに沿うために韻律外の一語をおいたことはことさら読者の目をひくものである。

この一件は、物語上、主人公の婚約という祝賀ムードにいったん水を差し、それを解決することで一層祝祭性を盛り上げる、という通俗的な仕掛けであるが、それだけではない。ロングマン版の注釈によれば、スペンサーと同時代のディクソン (John Dixon) という人物が、フィデッサことデュエッサの手紙を、スコットランド女王メアリ (Mary Stuart 1542-87) によるカトリック・イングランド女王としての正当な権利の宣言だと理解していた。(Hamilton 152) 例えば彼女が二番目の夫ダーンリー (Henry Stuart, Lord Darnley 1545-67) の殺害を共謀したとされる手紙が出てくるなど¹⁵、波乱に満ちたメアリの生涯はとかく書簡が問題となっていたため、それをスペンサーが作品中に利用したことは想像に難くない。本書の出版のわずか3年前に執行されたメアリの処刑は読者の記憶に新しかったはずである。

歴史的アレゴリーによってデュエッサがメア리를表すことは、1596年版の第5巻、「正義」の物語の第9歌においてエリザベス一世の寓意表象の一つであるマーシラ (Mercilla) の宮廷でデュエッサが裁きにかけられ処刑される、というくだりで明確にされることになる。デュエッサがメア리를表すことは、殆ど透明であった。それはメアリの息子であるスコットランド王ジェームズ六世 (1603に英国王ジェームズ一世) が『妖精の女王』を読んで激怒したことにも示される。この裁判と処刑の描写の直前、マーシラの宮廷を訪れた正義の騎士アーティガルは、そこで一人の男がその舌を柱に釘付けにされるという残酷な処罰を目撃する。彼の罪状は、マーシラが陰謀を企んだという中傷であつ

15 いわゆる Casket letters と呼ばれるもので、メアリから次の夫となるボスウェル (James Hepburn, Earl of Bothwell, 1535-78) に宛てて書かれた8通の手紙と数編のソネットを入れた小箱が発見され、メアリの裁判において有罪の証拠として提出されたが、メアリはこれを捏造だと主張した。

た。この男の名前は「よき泉」(BON FONTS)であったものが今では「悪しき泉」(Malfont)と呼ばれる¹⁶。彼の罪は、口頭による中傷 (bold speeches) のみならず、詩人として出版した卑しい詩、悪口の韻文 (lewd poems, rayling rymes) であることから、釘づけにされた舌は、文字による発信をも象徴するものであることがわかる。捏造、中傷といった、言葉による攻撃が印刷を通じて行われ、またそれらを取り締まる検閲と厳罰も盛んに行われたことが示され、ここに『羊飼いの暦』を匿名出版して以来のスペンサー自身の物書きとしての不安を読むことができる。

2.5 秘書としての書簡執筆

ここまでスペンサーの作品における書簡を見てきたが、最後にスペンサーの詩人としてではない書簡について見ておこう。1580年の『書簡集』と1590年の『妖精の女王』の間には、10年の空白がある。この間スペンサーは、アイルランド総督グレイ卿 (Arthur Grey de Wilton Lord Deputy of Ireland 1536-93) の秘書として随行し、グレイの解任後もアイルランドにとどまり、南部マンスター議会の書記の職を得ていた。その間作品の出版はなく、『妖精の女王』その他の手稿を回覧したにとどまっている。秘書としての仕事は、要人の書簡や報告を口述筆記あるいは代筆すること、および要人のもとに届いた書簡のコピーを作成することである。筆跡の研究をもとに、1580年代のスペンサーが秘書として代筆した書簡集が2009年に出版され、私たちは始めて秘書としてのスペンサーにじかに触れることができるようになった。これらはスペンサーの文章とはいいがたく、また出版されたものではない、という意味で今回は詳しく取り上げないが、この秘書業の記憶が、スペンサーののちの虚構作品に表面化している事例を紹介したい。

16 font の語に印刷用フォントという意味を読んで、印刷文化の墮落を指している、と解したいところであるが、1590年代に残念ながらその意味はまだはなかった。

とりあげるのはグレイからエリザベスへの報告書簡と、スペンサーが書いたアイルランド植民論である。1580年11月、スペンサーは総督グレイに随行して、アイルランド西部ディングル半島先端のスメリック（Smerwick）にいた。当時、マンスターの勢力であるデズモンド一族がイングランドの支配に反旗を翻し、彼らがカトリック勢力であったことから、イタリアとスペインから応援軍が到着して砦に立てこもった。グレイはこの砦を火力で圧倒し、降伏した反乱軍の大半を処刑した。以下はこの経緯を総督グレイが秘書スペンサーの筆記によって女王へしたためた11月12日付の報告書簡である。

My answer was …that at my hands no condition of composition they were to expecte, other then that simply they should render me the forte, & yield theyr selues to my will for lyfe or death…Morning come…the Coronell comes forth with x or xij of his chiefe ientlemen, traying their ensignes rolled vp, & presented them vnto mee with their liues & the Forte: I sent straight certein gentlemen in to see their weapons and armures layed downe & to gard the munition & victaile there lefte for spoile: Then putt I in certeyn bandes, who straight fell to execution. There were 600 slayne; munition & vitteile great store, though much wasted through the disorder of the Souldier, which in the furie could not bee helped. Those that I gaue lyfe vnto, I haue bestowed vpon the Capteines & gentlemen, whose seruice hath well deserved: (18-19)

下線部分からわかるように、グレイが一切の交渉を拒否するところから、翌朝に反乱軍の上層部が軍旗をたたんで降伏し、砦と彼ら自身を差し出してきたところ、グレイが彼らを武装解除して武器弾薬と食糧を押収したのち、600名を処刑し、兵士たちには略奪するにまかせた経緯が述べられている。当時から戦争にはルールがあり、戦闘が停止し、捕虜となった者の生命は奪ってはならないことになっていたため、グレイの行動は「スメリックの虐殺」として批判を浴び、結局1582年彼はアイルランド総督を解任される¹⁷。

17 国際法は、スペンサーの時代より数十年あとのグロティウス（Hugo Grotius 1583-1645）による『戦争と平和の法』（*De iure belli ac pacis* 1625）を起源とする

それから14年後、グレイは既にこの世にはなかったが、スペンサーは対話体のアイルランド植民論『アイルランドの状況管見』(*A View of the State of Ireland* 出版は死後の1633)の中で、「流血漢」(bloody man)というグレイに貼られたレットルを剥がそうとしている。ここでは二人の人物の対話、という虚構の枠組みの上に、スペンサーのアイルランド植民論が展開される。

Eudox. Indeed so have I heard it heere often splken, but I perceive (as I alwayes verily thought) that it was most unjustly, for hee was alwayes knowne to bee a most iust, sincere, godly, and right noble man, farre from such sternenesse, farre from such unrighteousnesse. But in that sharpe execution of the *Spaniards*, at the fort of *Smerwick*, I heard it specially noted, and if it were true as some reported, surely it was a great touch to him in honour, for some say that he promised them life: others at least hee did put them in hope thereof.

Iren. Both the one and the other is most untire; for this I can assure you, my selfe being as neare them as any, that hee was so farre either from promising, or putting them in hope, that when first their Secretarie (called as I remember) *Signior Jeffrey an Italian*, being sent to treat with the Lord Deputie for grace, was flatly refused: And afterwards their Coronell named *Dom Sebastian*, came forth to intreate that they might part with their Arme like Souldiers, at the least with their lives according to the custome of Warre, and Law of Nations, it was strongly denyed him and told him by the Lord Deputie himselfe, that they could not iustly pleade either custome of Warre, or Law of Nations for that they were not any lawfull Enemies, …(74-75)

上の引用では、一般読者の代弁者であるユードクサス (Eudoxus) が、「噂ではグレイは降伏した敵の命を保障しながら、あるいは希望を与えながら、約束を違えて殺害した、とされるが、それが本当であるなら、グレイの名誉に

ㇿ一般に理解されているが、グロティウスはスペインの神学者ビトリア (Francisco de Vitoria ca1483-1546) およびスアレス (Francisco Suárez 1448-1517) に影響を受けているといわれる。従って16世紀には国際法の基礎的な考え方は存在したと言えるだろう。

とって大きな汚点だ」という。これに答えて、スペンサーの分身であるアイリニアス (Irenæus) が「自分自身誰よりもグレイに近いところにいたから請合うが」として、敵の使者が恩赦を求めて送られてきたときにグレイはそれを言下に断ったこと、その後スペイン人の大佐が戦争の慣習と諸国民の法に基づき、生きたまま退却することを許されたいと願い出たときにも、彼らは祖国から正式に派遣された軍ではなく反逆者にすぎないからそれらの慣習や法は適用されない、と断言したことが述べられている。括弧内に、「自分が覚えている名前では」(called as I remember) とあるところから、スペンサーがこれを記憶に基づいて書いていることが分かる。その記憶とは、単にこの虐殺を目撃したことではなく、16年前にそれをグレイの秘書として文字によって書簡に筆記したことに他ならない。実際、敵の使者の名前は誤って思い出されている。

(たとえそれが他人の文章の筆記であるとしても) 書簡 (letter) を書くことは、手を動かし文字 (letters) としてメッセージを紙に定着させるとともに、自らの脳髓にそれを刻み込む行為であったといえるであろう。しかしその書簡は時を経て最初の形とは微妙に異なる形で虚構化され、ページに刻まれ、そして公共の記憶に刻まれていくのである。スペンサーの秘書としての書簡筆記が彼の虚構作品にどう対応し、またそこにずれがあるとすればそれが意識的なものか無意識的なものか、など今後研究すべきことはたくさんある。

以上、『羊飼いの暦』からハーヴィとの怪しい自己宣伝書簡集、アイルランドでの秘書としての書簡筆記業、『妖精の女王』のテキストおよびバラテキスト上の書簡、その後のもろもろの詩作品につけられた書簡体献辞と、エドモンド・スペンサーの書簡執筆を駆け足で見えてきた。スペンサーにとって書簡執筆は個人と個人のやりとりをはるかに超えた、公への発信であったとして、本稿の結論としたい。

Bibliography

- Burlinson, Christopher and Andrew Zurcher. "Secretary to the Lord Grey Lord Deputie here': Edmund Spenser's Irish Papers." *The Library*, Vol. 6, issue 1, 2005, pp. 30–75.
- De Selincourt, E., and J.C. Smith, editors. *The Poetical Works of Edmund Spenser*. OUP, 1935.
- Gibson, Bruce. "Paraintertextuality: Spenser's Classical Paratexts in The Shepheardes Calender." *The Roman Paratext: Frame, Texts, Readers*, edited by Laura Jansen, Cambridge UP, 2014, pp. 243–261.
- Hadfield, Andrew. *Edmund Spenser: A Life*. Oxford UP, 2012.
- Hamilton, A.C. et al. editors. *The Spenser Encyclopedia*. U of Toronto P, 1990.
- Jardine, Lisa. *Erasmus, Man of Letters: The Construction of Charisma in Print*. Updated edition, Princeton UP, 2015.
- Kearney, James. "Reformed Ventriloquism: *The Shepheardes Calender* and the Craft of Commentary." *Spenser Studies*, vol. 26, 2011, pp. 111–51.
- Ovid, Publius Naso. *Tristia, Ex Ponto*, edited with translation by Arthur Leslie Wheeler, Heinemann, 1965.
- Raleigh, Sir Walter. *The Discoverie of the Large, Rich and Bewtiful Empyre of Guiana*, edited by Neil L. Whitehead, U. of Oklahoma P, 1997.
- Shoock, R. J. "Replies." *Notes and Queries*, vol. 16, 1952, pp. 370–72.
- Sommer, H. Oskar, ed. *The Shepheardes Calender*. London, 1895.
- Spenser, Edmund. *Complaints. Containing sundrie small poems of the Worlds Vanitie*. London, 1591.
- . *The Faerie Queene. Disposed into Twelue books, Fashioning XII. Morall vertues*. [Books I–III] London, 1590.
- . *The Faerie Queene. Disposed into Twelue books, Fashioning XII. Morall vertues*. [Books I–VI] London, 1596.
- . *The Faerie Queene*, edited by A. C. Hamilton. 2nd ed., Longman, 2001.
- . *Selected Letters and Other Papers*, edited by Christopher Burlinson and Andrew Zurcher, Oxford UP, 2009.
- . *The Shepheardes Calender. Coteyning twelue AEGlogues proportionable to the twelue monethes*. London, 1579.
- . *Three proper, and wittie, familiar Letters: lately passed between two Uniuersitie men*. London, 1580.
- . *A View of the State of Ireland Written dialogue-wise between Eudoxus and Irenaeus*, edited by James Ware, Dublin, 1633. Rpt., Da Capo, 1971.

Steinberg, Theodore L. "E.K.'s 'Shepherd's Calendar' and Spenser's." *Modern Language Studies*, vol. 3, no. 2, 1973, pp. 46-58.

Zurcher, Andrew. "Allegory and Epistolarity: Cipher and Faction in Sidney and Spenser." *Cultures of Correspondence in Early Modern Britain*, edited by James Daybell and Andrew Gordon. U. of Pennsylvania P., 2016, pp. 110-27.

ジェラルド・ジュネット『スイユ：テキストから書物へ』和泉涼一訳 水声社 2001.

竹村はるみ「書齋の中のシドニー・サークル：スペンサーの友情伝説を読む」圓月勝博編『食卓談義のイギリス文学：書物が語る社交の歴史』彩流社 2006, pp. 19-59.